令和６年度 事業報告

岡山理科大学附属中学校

優れた教育を提供し、学んでいる子ども達の学力をさらに伸ばし、難関大学・難関高等学校入試を突破するだけでなく、社会に出て各分野で活躍できる人材を育成します。

経済や社会の構造変化に加え、情報と文化のグローバル化が一層進展し、生成 AI をはじめとする科学技術が急速に進歩する現代社会においては、従来の価値観や経験、習慣、常識のみでは対応しきれない新たな課題が次々と現れています。新型コロナウイルス感染症の大流行からの回復を経て、世界はポスト・パンデミックの時代に入りましたが、その経験は今も教育や社会活動に影響を与え続けています。

また、地球規模での気候変動や国際的な紛争、地域における人口減少と高齢化など、複雑な課題が山積するなかで、社会の各分野で持続可能な発展に貢献し、未来を切り拓く力をもった人材の育成が、これまで以上に重要な課題となっています。

このような認識のもと、本校では中等教育の段階において、確かな学力の定着を図るとともに、自ら学び、考え、他者と協働して行動できる力、そして多様性を尊重しつつ持続可能な社会の形成に貢献できる人格の育成を目指し、令和６年度の事業計画に掲げた重点項目に基づく教育活動と学校運営を展開しました。

Ⅰ．教育の推進

1）学力を定着・向上させるための対応

2）自らを律する人格の形成と基本的な学習生活習慣の確立

Ⅱ．生徒の支援

1）生徒の多様な資質や希望に応える進学ルートの設計

2）生徒支援・指導体制の充実

Ⅲ．地域社会との連携

Ⅳ．国際化の推進

Ⅴ．DX の推進

Ⅵ．ガバナンス体制と内部質保証システム

岡山理科大学附属中学校　校長　田原　誠

Ⅰ．教育の推進

１．学力の定着・向上についての目標

中期計画	令和６年度　事業計画	令和６年度　事業報告	評価
［1］学力の定着・向上についての計画 1）進路志望への対応 進路志望に対応したクラスやカリキュラム、さらに教育内容の最適化を進めて生徒の志望に応じた指導に取り組む。	［1］クラス編成と教育目標 卒業後の多様な進路志望に対応できる SR(Special Route)コース＊を設定して教育を進めます。生徒には進路をしっかり考えて選択させ、それぞれが進む道を実現する学力の養成に努めます。 【SR コース＊：難関県立高校等をめざす 3 年間ルート、附属高校で学び国公立や難関私立大学をめざす 6 年間ルート、附属高校から岡山理科大学等の関連校に進学する 10 年間コースを示す。】	［1］クラス編成と教育目標 生徒一人ひとりの多様な進路志望に応じ、基礎学力の充実と学びへの主体的な取り組みを支えるために、1・2 年生では両クラスを平等に編成し、共通の指導体制のもとで学力の定着と基礎力の強化に努めました。 3 年生では、後期より進路選択に即した柔軟な授業体制を整え、難関公立高校への進学を目指すグループと、岡山理科大学附属高等学校への進学を志望するグループに分かれて授業を実施しました。 このような体制のもとで学習意欲の向上と目標の明確化を図り、令和 6 年度高校入試では、難関県立高校などに多数の生徒が進学するなど、生徒一人ひとりが希望進路の実現に向けて成果を上げることができました。	S
	［2］共通の教育目標 適切な学習習慣の定着に深く関わる人格的な要素を育成します。校訓「立志三風」に基づく指導により、自らを律し、目標を持って主体的に頑張る生徒、真心で他人と協働できる生徒を育てます。	［2］共通の教育目標 人格の形成を重視する本校の校訓「立志三風」を基盤に、生徒一人ひとりが自己の生き方を見つめ、目標をもって行動できる力を育むことを目指しました。そのために、基本的生活習慣の確立をはかり、日常の学校生活や行事、地域との関わりを通じて、集団の中で他者と協力し、主体的に行動する力や思いやりの心を育む指導を行いました。	A
2）思考力・表現力などの養成 論理的な思考力や表現力を育む授業をカリキュラムに取り入れる。また、一人一台端末の機能を十分活用する授業を実施する。	［3］カリキュラム 教科学習の時間を増やすことで基礎学力の充実を図っています。難関公立高校や難関私立高校への進学を目指す生徒には、進学に必要な学力を養成します。また、高校で求められる、自分の考えをわかりやすく説明できる力の養成に努めます。さらに、探求活動を推進し、科学的・論理的な思考能力を高めます。	［3］カリキュラム 中高一貫コースとして体系的に設計した授業時間を活用し、中学校段階においては基礎学力の確実な定着とともに、学習内容の理解を深めるための学び直しを重視しました。特に、思考力・判断力・表現力の育成を意識した授業展開に取り組み、進学に必要な学力の土台を築きました。 国語の授業では「論理」の時間を設定し、論理的に思考し、自らの考えを的確に説明・表現する力の育成を図りました。また、生徒がより主体的・対話的に学ぶ姿勢を育むカリキュラムづくりを推進しました。	A

中期計画	令和６年度　事業計画	令和６年度　事業報告	評価
	［4］論理力向上のための取り組み 国語授業の中で「論理エンジン」を副教材として取り扱い、論理的な文章構成の把握や文章作成の能力を養います。論理的思考力・表現力は、外部試験（「Literas 論理言語力検定」や「作文検定」）により生徒の達成感を導きながら、その定着を進めます。	［4］論理力向上のための取り組み 国語授業において、副教材として「論理エンジン」を活用しました。これにより、論理的な文構成の理解を深め、筋道を立てて自分の考えを文章化する力の育成に努めました。 また、日常の学習成果を客観的に測定する機会として「作文検定」に全員で取り組み、目標とした３級以上の合格者率 90%以上を本年度も達成しました。論理力の向上は、他教科での記述力やプレゼンテーション活動にも良い影響を与え、生徒の表現力全体の底上げにつながりました。	A
	［5］GIGA スクール構想への対応 校内の高速インターネット環境の整備と合わせて導入した生徒一人一台の端末を活用して、プログラミング等の ICT 教育や対話型の学びの実践に取り組みます。	［5］GIGA スクール構想への対応 中学校全生徒に対して１人１台のクロームブックを貸与し、日常的な学習活動において積極的な ICT 活用を進めました。英語の授業では英検対策アプリを用いて、個別最適な学習を行い、プログラミング学習では「Life is Tech !」を活用し、論理的思考力と創造力の育成に取り組みました。 また、生徒の ICT スキルは着実に向上しており、プレゼンテーション資料や学校行事に関する広報物の作成、探究活動における調査・発表などにもクロームブックを活用するなど、情報活用能力の育成にも成果が見られました。	B
3）授業改善のための教員の教える力の改善 授業改善のために必要な教員研修を実施する。	［6］授業改善 これからの授業に必要とされるアクティブラーニングでの授業や GIGA スクール構想などの ICT を活用した授業方法、生徒の成績評価方法などの教職員研修会を定期的に実施します。また、クラウド型校務支援システム（BLEND）を活用して教員間や保護者との情報交換を促進します。 さらに、教員の教育力強化のため、ケンブリッジ大学英語検定機構認定西日本試験センターJP176 との連携を継続します。	［6］授業改善 本年度も昨年度に引き続き、各教科において教科主任を中心とした教科会議を定期的に開催し、授業改善に向けた協議と実践の推進を図りました。定期的に実施される模擬試験の結果については、進路指導課が中心となり、学年ごとの成績データを分析・共有し、それをもとに教科担当間で指導法の見直しや改善を行う体制を強化しました。 また、附属高等学校で国際バカロレア（IB）教育を担当する教員によるグループ実習の機会を設け、生徒が IB 型の学びの一端に触れ、探究的・国際的な視点での学びを体験しました。 さらに、学園内に設置されたケンブリッジ事務局と連携し、英語のみで構成された教材を活用することで、生徒が「活きた」英語に触れる機会を意識的に増やし、言語の運用力と国際理解を高める授業づくりを進めました。	B

中期計画	令和６年度　事業計画	令和６年度　事業報告	評価
	［7］教科会議・学年団会議の強化・連携 　各教科において、教科主任を中心とした教科会議を開催し、授業改善等の取り組みを推進し情報を共有することで、指導力の向上を進めます。 　また、学年団会議ならびに中学校担任会議において、生徒の情報を共有することで、的確な指導を行います。	［7］教科会議・学年団会議の強化・連携 　本年度も、教科主任を中心とした教科会議を継続的に実施し、授業改善や評価方法の見直し、学力向上に向けた取組を全体で推進しました。また、教科横断的な視点を取り入れるべく、学年団との連携も強化し、生徒理解に基づく効果的な指導法の共有を図りました。 　課題提出状況については、教員用共有サーバーにリアルタイムでデータを記録・共有する体制を整え、クラス担任が未提出者への早期対応や個別指導に活用できるよう工夫しました。これにより、学習管理と生活指導を有機的に結びつける指導体制が一層充実しました。 　さらに、中学校担任会議では、生徒指導に関する情報を定期的に共有し、全教員で対応を統一する体制を整えることで、安心・安全な学習環境の維持に努めました。	B

２．人格の形成と学習生活習慣の確立の目標

中期計画	令和６年度　事業計画	令和６年度　事業報告	評価
［2］　人格の形成と学習生活習慣の確立の計画 　学校行事などの機会を通して、校訓や教育方針の積極的な指導を行う。また、服装と挨拶の励行を指導する。	［8］校訓 　加計学園建学の理念の下、「立志三風」を掲げ、また、「生活三則」の指導に取り組んでいきます。 立志三風 一、慎独・去稚心の志風を守る（自主） 一、振気・勉学の良風を尚ぶ（努力） 一、忠恕・爽凜の美風を養う（友愛） 生活三則 一、場を清めましょう 一、時を守りましょう 一、礼を正しましょう	［8］校訓 　本校の校訓である「立志三風」は、すべての教室に掲示し、日々の学校生活の中で生徒が意識できるよう環境を整えています。さらに、卒業式にあわせて実施する「立志式」や、生徒会選挙の立会演説会など、生徒全員が関わる行事において校訓を再確認する機会を設け、「立志三風」が示す理念を、節目ごとに生徒自身が振り返り、内面化できるように努めました。 　このような活動を通じて、生徒が将来の目標に向かって志を立て、誠実に、そして自律的に行動できる人格の形成を目指しました。	A

中期計画	令和６年度　事業計画	令和６年度　事業報告	評価
	［9］服装指導の実施 「凜とした爽やかさ」をモットーに、TPO に合わせて、清々しさを持った着こなしを指導します。	［9］服装指導の実施 服装指導については、クラス担任および生徒指導課を中心に、日常的にシャツや上着の着こなしなど基本的な身だしなみについて丁寧な指導を行いました。 また、毎週水曜日の登校時には、教員と生徒会役員が校舎入口に立ち、服装に乱れがある生徒にはその場で声かけを行い、自ら身だしなみを整える意識を促す取組を継続しました。生徒会役員が主体的に関わることで、相互の意識づけと規律ある学校文化の醸成につながっています。	A
	［10］挨拶の励行 朝のあいさつ運動や職場体験などを通し、気持ちを込めて挨拶ができるように、また、相手や状況に応じた正しい言葉遣いができるように指導します。	［10］挨拶の励行 毎週水曜日の登校時に教職員と生徒会役員が校門前に立ち、明るく元気なあいさつを呼びかける活動を継続しました。また、職員室入室時のあいさつについても継続して指導を行い、相手を意識した丁寧な振る舞いが自然と身につくよう取り組みました。授業開始・終了時のあいさつも落ち着いて行えるようになっており、規律ある学習環境づくりに貢献しています。	A
	［11］共通の教育目標 校訓「立志三風」の指導により、甘えを捨てて困難を乗り越える生徒、目標を持って主体的に頑張る生徒、真心で他人と協働できる生徒を育てます。 「生活三則」に則り、基本的な生活習慣を確立した上で、集団の中で協力しながら活動できる力を身につけるよう指導します。	［11］共通の教育目標 本校の校訓「立志三風」に基づき、生徒の自律を育むことを教育目標の柱とし、入学当初に見られる依存的な傾向や小学生的な甘えの習慣からの脱却を目指した指導を行ってきました。 日常のホームルーム活動を通しては、クラス内の役割や仕事を生徒同士が協力して遂行する力を養うとともに、責任感を持って集団の中で行動できる態度の育成に努めました。また、生徒会の委員会活動を定期的に開催し、生徒が主体的に学校生活を運営する力を培うよう促しました。 これらの活動を通して、生徒が自ら考えて行動し、他者と協働しながらより良い集団を築こうとする力を養成し、「立志三風」の具現化に向けた実践を積み重ねました。	A

中期計画	令和６年度　事業計画	令和６年度　事業報告	評価
	［12］将来につながるリーダーの育成 　体育祭、爽凜祭（学習発表会）、球技大会など様々な学校行事は実行委員の生徒が主体的に運営します。また、このような学校行事は、生徒会が統括します。生徒はこのような自主活動の中で企画力、実践力、思考力、協働して取り組む力などを高め、それぞれの人間形成に繋げます。	［12］将来につながるリーダーの育成 　体育祭、爽凜祭（学習発表会）、球技大会などの学校行事は、生徒が主体的に企画・運営に関わることを重視し、将来に活きるリーダーシップの育成を図る貴重な機会と位置づけています。 　これらの行事においては、準備段階から本番に至るまで、生徒同士が意見を出し合い、役割を分担しながら協働することで、責任感や判断力、他者との対話力、チームワークの精神といった、社会的な資質・能力を身につけることができました。 　生徒が自らの手で行事を創り上げる経験は、達成感や自己肯定感を育むとともに、今後の進路や社会参加への自信にもつながっています。	A

Ⅱ．生徒の支援

１．生徒の多様な資質や志望に応えるための目標

中期計画	令和６年度　事業計画	令和６年度　事業報告	評価
［3］　生徒の多様な志望に応えるための計画 　生徒の志望に沿って、体系的に学習し、体験する機会を提供し、各自のキャリア実現に求められる学力や能力を育成する。	［13］学習計画の指導 　「今未来手帳ジュニア版」を活用して、毎日記録を残し、継続的に振り返ることで、自らを客観的に捉え行動に反映させる力を育てます。また、「自分史プロジェクト」と題して、さまざまな活動についての振り返りをまとめ、ポートフォリオが作成できるよう指導します。	［13］学習計画の指導 　「今未来手帳ジュニア版」を活用し、生徒が毎日の To-Do チェックを行うことで、学習や生活の自己管理能力の育成を図りました。教員による継続的な声かけや振り返りの支援を通じて、計画的に学ぶ姿勢が着実に身についてきました。 　さらに、「自分史プロジェクト」を継続的に実施し、過去の自分を見つめ、現在の学びを評価し、将来の目標とつなげていくプロセスを大切にしました。この活動により、生徒は自己理解を深め、自らの進路や生き方について主体的に考え、具体的な行動に移す力を養っています。	A

２．多様な生徒の支援に関する目標

中期計画	令和６年度　事業計画	令和６年度　事業報告	評価
［4］　多様な生徒の支援に関する計画 健康管理や学校生活及び家庭生活における具体的な相談や指導に対応するため、生活支援体制を更に充実させる。	［14］家庭、地域社会との協力・連携強化 毎日の「今未来手帳ジュニア版」の確認などを通じ、家庭学習の計画力の養成を行い、生徒の学校生活や地域および家庭での生活などをサポートします。	［14］家庭、地域社会との協力・連携強化 「今未来手帳ジュニア版」を通じて家庭とのつながりを確保し、生徒が家庭での学習や生活を計画的に進めるよう指導を行いました。記録を通じた振り返りの習慣は、生徒の自己管理力の向上だけでなく、家庭とのコミュニケーションの機会を広げる役割も果たしています。 また、クラウド型校務支援システム「BLEND」を活用し、行事予定や学習状況、連絡事項などをリアルタイムに共有することで、保護者との信頼関係をさらに深めることができました。	A
	［15］教育相談室・保健室との連携 思春期である中学生期を心身とも健康に過ごせるように、担任や生徒指導課と教育相談室及び保健室が綿密に連絡を取り、連携を強化して生徒の指導を進めます。	［15］教育相談室・保健室との連携 新型コロナウイルス感染症の影響を受けた生徒同士の関係構築の困難さや、不安・ストレスの蓄積などから、教育相談室や保健室を利用する生徒が引き続き見られました。こうした状況に対し、担任と教育相談室・保健室との連携をさらに強化し、日常的な変化や小さな兆候を見逃さず、早期に支援を行う体制づくりを進めました。 学年団を含めたチームでの情報共有を図りながら、生徒一人ひとりに寄り添った対応を心がけ、安心して学校生活を送ることができる環境整備に努めました。	A

Ⅲ．地域社会との連携

１．良好な社会的関係構築に関する目標

中期計画	令和６年度　事業計画	令和６年度　事業報告	評価
［5］　良好な社会的関係構築に関する計画登下校時の中学生としてのマナー順守を徹底する。	［16］家庭、地域社会との協力・連携強化 中学生専用定期バスの乗車指導・通学指導など登下校指導の実施、毎日の「今未来手帳ジュニア版」の確認などを通じ、生徒の地域および家庭との良好な関係を構築します。	［16］家庭、地域社会との協力・連携強化 中学生専用の定期バスの乗車マナー指導や、通学時の登下校指導を継続して実施し、生徒が安全に登下校できるよう支援するとともに、地域社会との良好な関係維持に努めました。日常のあいさつや交通マナーの徹底を通して、地域の一員としての意識を高める指導も行いました。 また、家庭との連携においては、情報誌「学校だより」の定期的な発行や「生活記録ノート」の確認を通じて、学校生活の様子を丁寧に伝えるよう努めました。さらに、PTA の協力による保護者会や茶話会を定期的に開催し、保護者同士および教職員とのコミュニケーションを深める機会を設け、相互理解と信頼関係の構築に寄与しました。	B

２．地域教育の目標

中期計画	令和６年度　事業計画	令和６年度　事業報告	評価
［6］　地域教育の計画 　教育活動やマナー指導を通して、地域社会との関りの重要性を生徒に説明する。	［17］社会規範育成への取組 　外部講師による講演などを活用し、規範意識の啓蒙に努めます。学校独自の規則だけではなく、アクティブラーニングやプレゼンテーションの指導を通じ、その場の状況に最も適した言動が取れるよう、常日頃から生徒への指導や話し合いを行います。	［17］社会規範育成への取組 　ホームルーム活動や道徳授業、さらに外部講師を招いた講演などを通じて、生徒が学校という枠を越え、広い社会の一員としての自覚を持ち、責任ある行動をとれるよう意識づけを行いました。社会のルールや公共性を理解し、自分の言動が他者や社会に与える影響を考える力を育むことを目指しました。 　また、総合的な学習の時間では、口頭発表の機会を積極的に設け、自分の考えをわかりやすく伝える力を育成するとともに、場の状況や相手に応じた言動ができるような指導を工夫しました。これにより、社会性・対話力・表現力の向上が見られ、生徒一人ひとりが自律した行動を取る意識を高めています。	B
	［18］情報教育 　生徒のインターネットリテラシーの現状を踏まえ、情報モラルの向上に努めます。その一環として岡山県警察本部より講師を招き、「インターネットモラル教育」の講演を実施します。また、SNS 等での個人情報の適切な扱いを指導します。	［18］情報教育 　岡山県警察本部から講師をお招きし、「非行防止教室」を開催しました。その中で、スマートフォンや SNS 等の使用に関する具体的な事例を通じて、情報社会における危険やリスクを正しく理解し、適切に判断・行動できる力の重要性を生徒に伝える機会となりました。 　また、生徒指導課による情報モラル教育を通じて、日常生活における情報機器の使い方などに関する指導も継続的に行いました。	B
	［19］塾との関係の強化 　中学校入試における私塾の影響力は大きく、塾からの情報把握と本校からの塾へのタイムリーな広報活動は、受験・入学者の確保に欠かせません。塾との対話は、入試広報の専任教員が引き続き一元的に対応することとし、塾から信頼される関係を構築します。 　さらに、入試結果を踏まえた塾対象の入試説明会を実施します。	［19］塾との関係の強化 　本年度も、地域の学習塾や小学校との良好な関係構築とその継続的な維持を目的として、専属の担当者２名による広報・連携活動を積極的に展開しました。定期的な訪問を通じた丁寧な対話を重ねることで、教育方針や指導体制に対する理解を深めていただき、信頼関係の強化につなげることができました。 　また、各塾での個別説明会や小規模な進学相談会にも柔軟に対応し、本校の特色や最新の教育内容について直接説明・講演する機会を設け、情報発信の充実を図りました。 こうした専属担当者による計画的・一元的な対応により、塾や小学校との統合的な連携が実現しており、個別の教員による塾訪問は原則として行っておりません。	B

Ⅳ．国際化の推進

１．国際力向上の目標

中期計画	令和６年度　事業計画	令和６年度　事業報告	評価
［7］ 国際力向上の計画 全クラスで英会話授業を実施し、英検やケンブリッジ英検での取得目標を学年ごとに提示して、英語力の向上を進める。また、附属高校で実施されている国際バカロレア教育を取り入れた活動を実施する。	［20］英会話 「総合英語」の授業の中で、英会話を1～3年生の全クラスで実施し、自ら積極的にコミュニケーションをとれる姿勢を養います。また、4技能（聞く、話す、読む、書く）に対応したケンブリッジ大学英語検定機構が発刊するコースブック・英語教材を使用し、SDGsについて英語のテキストで学びながら社会意識の向上を図ります。	［20］英会話 総合的な学習の時間において、日常的な英会話を学ぶ機会を全クラスで設けました。授業では、聞く・話す・読む・書くの4技能をバランスよく取り入れた指導を行い、実践的な言語運用力の向上を図りました。特に、ケンブリッジ大学英語検定機構認定 西日本試験センター（JP176）のスタッフの協力を得て、国際基準に基づいた英語教育の質の向上に努めました。こうした取組を通じて、生徒はグローバルな視野を広げるとともに、英語を使いこなす意識を高めることができました。	B
	［21］実用英語技能検定・漢字能力検定を全生徒に実施 (1) 1年在籍生徒の9割以上が5級以上の取得を目標とします。 (2) 2年在籍生徒の8割以上が4級以上の取得を目標とします。 (3) 3年在籍生徒の6割以上が3級以上の取得を目標とします。 (4) 教員が生徒に対し、積極的に受験指導を行います。	［21］実用英語技能検定・漢字能力検定を全生徒に実施 実用英語技能検定および日本漢字能力検定を全校生徒対象に実施しました。漢字検定は11月に、英語検定は1月までに受検を行いました。 漢字検定では、1年生で5級以上取得が85%、2年生で4級以上が64%、3年生で3級以上が27%という成果を上げました。 また、英語検定においては、3級以上を取得した生徒が45名に達し、英語4技能の習得を目指す日頃の学習成果が現れました。	C
	［22］希望者にはケンブリッジ Key Test を実施 (1) 1年修了時にはCEFRのA2レベルをクリアすることを目標にします。 (2) 2年修了時にはCEFRのB1レベルをクリアすることを目標にします。 (3) CEFRのB1レベルをクリアした生徒にはB2レベルの受験を勧めます。	［22］希望者にケンブリッジ Key Test を2024年7月に実施 受験者15名で、1年生3名中2名がCEFR A2を獲得。2年生8名中5名がCEFR　A2を獲得。3年生4名中3名がCEFR　A2を獲得。 CEFR　Bレベルには達しなかった。 中学生でCEFR　B2レベルというのは簡単に獲得できるものではないので、さまざまな観点で検証が必要。	C
	［23］国際バカロレア教育の活用 附属高等学校で実施されている国際バカロレア教育の手法を取り入れ、課題に対して論理的・批判的に考えて研究する取り組みを設けます。	［23］国際バカロレア教育の活用 附属高等学校で国際バカロレア教育を担当している教員の協力のもと、中学生を対象としたIB型授業の一端を体験するグループ実習の機会を設けました。探究的な学びに触れる中で、生徒は問いを立て、自ら調べ、仲間と意見を交わしながら思考を深める学習のプロセスを体験しました。	B

Ⅴ．ＤＸの推進

１．ICT 活用に関する目標

中期計画	令和６年度　事業計画	令和６年度　事業報告	評価
［8］ ICT 活用に関する計画 ICT 活用推進のための FD 実施及び各種証明書の申請手続きのweb 化を図る。	［24］教職員研修 これからの授業に必要とされるアクティブラーニングでの授業やGIGA スクール構想などのICT を活用した授業方法、成績評価方法などの教職員研修会を定期的に実施します。	［24］教職員研修 本年度は、教職員の ICT スキル向上を目的に、クロームブックを活用し、Google Classroom やロイロノート・スクールの実践的な活用を通して、教員間での情報共有や授業実践の工夫を促進しました。 また、保護者との連絡や成績処理など、校務のさまざまな場面でクラウド型プラットフォーム「BLEND」を積極的に活用し、生徒の出欠管理・成績処理・連絡配信などの業務を効率化しました。 さらに、職員室に設置したデジタルサイネージにより教職員間でのリアルタイムな情報共有を徹底することで、校内の情報伝達の迅速化と業務の見える化を図りました。	B
	［25］申請手続きの Web 化 各種証明書の申請手続き Web 化のための各種方法を調査し、比較検証します。	［25］申請手続きの Web 化 クラウド型校務支援システム「BLEND」の活用を通じて、欠席連絡や保護者への通知配信など、日常的な連絡業務の ICT 化はすでに実現しています。今後は、事務処理のさらなる効率化と、保護者・在校生・卒業生を含むユーザー目線での利便性向上をめざし、段階的に電子化の範囲を拡大していく方針です。	C

Ⅵ. ガバナンス体制と内部質保証システム

１．学校運営の改善及び効率化に関する目標

中期計画	令和６年度　事業計画	令和６年度　事業報告	評価
［9］ 学校運営の改善及び効率化に関する計画 校長がリーダーシップを発揮できる環境を充実させるため組織及び運営の改善を継続的・恒常的に実施する。	［26］学校運営会議の強化 附属中学校は、今年度から高校生の学年がなくなり、附属高校とは生徒の学年進行で結びつく組織となります。このため、今年度は中学校と高校の垂直的な結びつきを十分に機能させるための学校運営方法を検証していきます。学校運営については、引き続き、校長、教頭、事務部長、並びに校務分掌の課長で組織する運営会議において、学校業務の企画立案および連絡調整を実施します。また、附属高校の学校運営会議に附属中学校の管理職が参加し、附属高校との合理的・一体的な運営を進めます。	［26］学校運営会議の強化 中学校と高等学校では協議事項において一部異なる特性があることから、中学校の運営における意思決定の迅速化と責任体制の明確化を図るため、中学校の職員会議は校長と中学校教頭が共同で主催する体制をとっています。 また、高等学校との連絡調整についても、中学校教頭が高校運営会議に継続的に参加することで、全体方針の共有と中高一貫校としての運営の一体化が図られました。こうした組織体制の見直しにより、中学校独自の運営力が高まると同時に、全体の調和も維持されています。 なお、学校運営全般に関する外部評価については、毎年度末に実施する保護者向けの「学校調査アンケート」により行っており、教育活動や学校運営に対する客観的な意見を取り入れながら、改善に活かしています。	B

２．教育の質保証に関する目標

中期計画	令和６年度　事業計画	令和６年度　事業報告	評価
［10］ 教育の質保証に関する計画 アクティブラーニングの導入や IB 教育の理念を取り入れた授業を実施することにより効果的な教育方法・教育内容を充実させる。	［27］授業改善　（［6］再掲） これからの授業に必要とされるアクティブラーニングでの授業や GIGA スクール構想などの ICT を活用した授業方法、生徒の成績評価方法などの教職員研修会を定期的に実施します。また、クラウド型校務支援システム（BLEND）を活用して教員間や保護者との情報交換を促進します。	［6］授業改善 本年度も昨年度に引き続き、各教科において教科主任を中心とした教科会議を定期的に開催し、授業改善に向けた協議と実践の推進を図りました。定期的に実施される模擬試験の結果については、進路指導課が中心となり、学年ごとの成績データを分析・共有し、それをもとに教科担当間で指導法の見直しや改善を行う体制を強化しました。 また、附属高等学校で国際バカロレア（IB）教育を担当する教員によるグループ実習の機会を設け、生徒が IB 型の学びの一端に触れ、探究的・国際的な視点での学びを体験しました。 さらに、学園内に設置されたケンブリッジ事務局と連携し、英語のみで構成された教材を活用することで、生徒が「活きた」英語に触れる機会を意識的に増やし、言語の運用力と国際理解を高める授業づくりを進めました。	B

中期計画	令和６年度　事業計画	令和６年度　事業報告	評価
	［28］国際バカロレア教育の活用 （［23］再掲） 附属高等学校で実施されている国際バカロレア教育の手法を取り入れ、課題に対して論理的・批判的に考えて研究する取り組みを設けます。	［23］国際バカロレア教育の活用 附属高等学校で国際バカロレア教育を担当している教員の協力のもと、中学生を対象としたIB 型授業の一端を体験するグループ実習の機会を設けました。探究的な学びに触れる中で、生徒は問いを立て、自ら調べ、仲間と意見を交わしながら思考を深める学習のプロセスを体験しました。	B

３．内部質保証に関する目標

中期計画	令和６年度　事業計画	令和６年度　事業報告	評価
［11］　内部質保証に関する計画 内部質保証を充実させ、組織運営の改善に活用するため、的確な評価指標を設定し、適正な個人評価（教員活動評価）を実施する。	［29］生徒による授業評価・教員自身による授業評価 確かな学力を育むために、教員の授業改革が生徒にどのように受け止められているのかを知り、生徒の側から捉えた授業改善を進めるとともに、教員が自己評価を行いながら改善点を明らかにして、授業改善に活かします。	［29］生徒による授業評価・教員自身による授業評価 生徒の視点から授業を見直す機会として、12月に「生徒による授業評価アンケート」を本年度も実施しました。生徒の率直な意見や提案を集約・分析し、その結果を各教員へフィードバックすることで、授業の質向上に向けた具体的な見直しを促進しました。 各教員は、評価結果を基に自らの授業を振り返り、教材の工夫や指導方法の改善に取り組む姿勢を共有しました。これにより、教員が主体的に授業改善に取り組む体制が整い、生徒の学びにより寄り添った授業づくりが進められています。	B
	［30］生徒・保護者・第三者による学校評価 学校教育活動が教育目標の実現のため適切に行われているかについて、生徒・保護者ならびに第三者による外部評価を踏まえてさらなる改善を図ります。	［30］生徒・保護者・第三者による学校評価 本年度は学校評価を１月に実施し、生徒・保護者・第三者からの意見を集約・分析しました。集計結果については、保護者にも丁寧にフィードバックを行い、学校運営に対する透明性と信頼の醸成につなげました。 寄せられた声を真摯に受け止め、教育活動や学校生活における課題や改善点を明確化し、教職員全体で共有しました。こうした取り組みにより、学校評価が単なる形式的なものではなく、教育の質を高めるための対話的プロセスとして機能するよう努めています。	B

４．財政基盤の強化に関する目標

中期計画	令和６年度　事業計画	令和６年度　事業報告	評価
［12］　財政基盤の強化に関する計画 経費を抑制するため財務情報等を活用し、財務分析を行うことにより業務の現状を検証し資源配分の重点化や経費削減など、より一層の効率化を実現する。	［31］財政基盤の強化 円滑な学校運営を進めるため、定員の確保を優先課題として本校の広報活動を展開します。特に、塾教員への理解を高め、入学者を安定的に確保していきます。財政的に体力のある組織を構築するため、将来を見据えた改革と選択を進め、人件費、教育研究経費、管理経費の適正化に取り組んでいきます。	［31］財政基盤の強化 財政基盤の強化を図るうえで、定員の安定確保を最優先課題と位置づけ、計画的かつ効果的な募集活動を展開してきました。その結果、令和７年度も、定員を上回る81名の入学が見込まれており、収容定員を超える在籍生徒数を維持する見通しとなりました。これにより、学校運営の財政的基盤が一層安定し、中長期的な教育活動の充実と持続可能な発展に向けた環境が整ってきました。 また、授業料については、県内の私立中学校の学納金などを参考にして、令和７年度より値上げすることとし、制度改革を行いました。 今後も、生徒・保護者から信頼される教育内容と学校の魅力を高めることで、さらなる安定した入学実績の確保に努めてまいります。	B

主な行事	
4 月 8 日	始業式
4 月 9 日	入学式
4 月 25 日	健康診断
5 月 11 日	授業参観
5 月 22 日～24 日	修学旅行
9 月 14 日	体育祭（岡山ドーム）
10 月 26 日	爽凜祭（学習発表会）
12 月 16 日	百人一首大会
1 月 31 日、2 月 1 日	校外活動
3 月 12 日	卒業式
3 月 19 日	終業式

学生数・教職員数

■在籍生徒数

（令和6年5月1日現在）

学校名	入学定員	入学者数	収容定員	在学者数
岡山理科大学附属中学校	80	80	240	253

（単位：人）

■教職員数

（令和6年5月1日現在）

校長	教頭	教諭	**教員　計**
1	1	12	**14**

※校長は附属高等学校と兼任

事務職員
1

（単位：人）

財務関係

■事業活動収支

（単位：千円）

科目 ＼ 年度			令和６年度 予算額	令和６年度 決算額
教育活動収支	収入	学生生徒等納付金	135,660	135,840
		経常費等補助金	70,269	70,457
		その他収入	7,685	7,047
		計	213,614	213,344
	支出	人件費	162,932	161,355
		教育研究経費	66,121	65,864
		管理経費	12,685	13,194
		その他支出	0	0
		計	241,738	240,414
教育活動収支差額			△ 28,124	△ 27,069
教活外	収	受取利息等	0	31
	支	借入金利息等	0	0
教育活動外収支差額			0	31
経常収支差額			△ 28,124	△ 27,038
特別	収	資産売却差額等	0	0
	支	資産処分差額等	0	0
特別収支差額			0	0

基本金組入前収支差額	△ 28,124	△ 27,038
基本金組入額合計	△ 200	△ 1,254
当年度収支差額	△ 28,324	△ 28,292

■財務改善に向けた取組

今後、岡山県内の１２歳人口が急速に減少することを踏まえ、安定的な学校運営を行うためには定員の確保が最優先課題であり、受験生のニーズに沿った募集活動はもとより、在校生の満足度を上げる必要があることから、募集活動においてはオープンスクールや入試だけでなく、学校の情報をホームページ、Facebook や Instagram でも、迅速に幅広く提供するとともに、多様化する生徒・保護者の進路実現に向けて、各塾に対しタイムリーな情報発信を行った。また、在校生については教育活動もとより、思春期である中学生期を心身ともに健康に過ごせるように、担任や生徒指導課と教育相談室及び保健室が綿密に連絡を取り、連携を強化した。更に、SR コースの導入計画が完成し、中学校教育だけを担う学校組織となり、難関県立高校等の進学を目指す 3 年間ルートでの実績が入学生確保の鍵となることからその充実に努めた。

■施設設備整備報告

令和６年度においては、ICT 教育環境の整備のため電子黒板を 2 台導入した。